

高校作文教育・覚え書

文 室 温 晴

(1)

今年の四月、本校のある一年クラス担任が、自己紹介文を書かせたところ、ある生徒は、次のように書いた。

「自分の性かくは、さておいて、ぼくは、漢字がだいきらいです。世の中ひらかながあれば、漢字みたいなものいらんと思いません。

ひらかなだけでもつうじるのになあとよく思います。

漢字みたいなもの、おぼえるのにめんどうだし、書くのもめんどう、それでぼくは、漢字使用反対派の一人といたしました。今まで自分からすすんで漢字をおぼえるということをしませんでした。それでそれで、なんとなんと、小学校も中学校もケツで卒業したんではなからうかと思えます。だれよりも漢字をしらん子でした。(以下略)」

三百字程度の文の中の、ほとんどが、漢字あるゆえに発生した、少年の屈折した思いで埋められている。本人の漢字力を調べてみると、実際に、他と掛離れて低いのである。

漢字を知らないために、小・中学校を「ケツで卒業した」という

のは、もちろん本人の謙遜もあろうが、高等学校の学習となると、この程度の文字力では、確におぼつかない。

ところで、この生徒は、高校生として、特異な生徒なのだろうか。

私は、そうは思わない。程度の差こそあれ、この少年と同じような気持を抱いている生徒は、かなり多いと思われる。この少年が、どうしてそこまで追い込まれてきたのか、その原因を探ってみる必要がある。

※

※

私は、少年に聞いてみた。「漢字に対して、このような考えを持つようになったのは、いつ頃からだ」と。少年は、「小学校三年、いや、五年かな」と答えた。この種の私の問いに、ほとんどの生徒は、この時期をあげる。小学校三年・五年とは、いったい、どういう時期なのだろうか。まず、小学校三年について。

「知的な能力も飛躍的に発達し、抽象的な思考形式をふむことができるようになりだすし、機械的な記憶も、目立って進む。知的な興味のままにいろいろなことを、百科辞書的に頭へ入れるし、おとなから見ればつまらないものでも収集することに興味を持

ち、宝物のように大切にする。語彙が発達し、読み書きが目立って進歩する。」(注一)

引用の意図に沿ってまとめれば、小学校中学年は「語彙が発達し、読み書きが目立って進歩する時期」だということになる。

ところで、この時期に児童が習得していく「語彙」とは、いったい、どのようなものであろうか。その時点で、「漢字」と「かな」とは、どのようにかわっているのだろうか。「漢字」と「かな」の二重構造が、学習者に特殊な負担をかけてはいないだろうか。

この問題を考えていくには、まず、入門期の指導について、その実態を見なければならぬ。

※ ※

小学校入門期の作文指導について、八木橋雄次郎氏は、次のような感想を述べておられる。

「ヴィゴツキーが、『オーストリアの研究』リッケは児童の書いているものを話と比べたら、七歳の児童は二歳の子どもが話すことができると同じ位しか書かない。』と書いているのは、書きことばの表現期に至って表現能力が急に低下するのではなくて、日本とは文字組織が完全に違うからではないだろうか。語のスペル、コンポジションなどに手間どるからではないだろうか。

日本では、ひらがなの読み書きさえできれば、いちおうの文章表現ができるのであるから、ありがたいことである。源氏物語で

も枕草子でも、ひらがなによる立派な文学作品であることを思うだけでも、ひらがなによる文章表現のできる日本人、特に日本の子どもたちは幸せであるといわなくてはならない。」(注二)

「ひらがなの読み書きさえできれば、いちおうの文章表現ができる」という「かな」の効用は、おそらく、世界でもあまり例のないものであろう。少なくとも、欧米各国から見れば、想像を絶するものに違いない。コミュニケーションに用いる文字としては、利用価値の高いものと言えよう。

一國の国民にとって、文章が書けるか書けないかということは、その国民が、どのような社会集団に属するかということと、密接につながっているはずである。これは、例えば、英語を公用語として用いている発展途上国において、英語の文章が綴れるかどうか、その属する集団を決定するであろうと思われることから、明らかなことである。

「かな」の習得のしやすさ、さらに、即文章力につながっていくという利点は、この国において、ほとんどの国民に文章力を保障しているという点、しかも、他の文明国と比べて、かなり低い知能層にまで文章表現力を保障しているという点で、注目されなければならない。

広い立場から「文字」の獲得を考えていく場合、「かな」あるゆえに、日本の子どもたちは幸せだと、確かに言い得る。「かな」の文章が、親と子、人と人との間を結び、強い絆の役割を果たし得ることは、何人も認めるであろう。

※ ※

「かな」の効用は、測り知れない。しかし、「かな」だけで一生の表記を推し通すことは、不可能である。どうしても、「漢字」を習得しなければならぬ。

「漢字」の習得が、正対すべき学習事項として、児童の意識にのぼってくるのは、小学校中学年においてであろう。この頃から、実質的な「漢字学習入門期」を迎えることになる。しかし、児童の側に立ってみると、一度完全にくり抜けた表記の世界で、今までは全く別の文字体系に出会うことになる。

一度目の門である「かな」は、門とすら意識されないうちに通り過ぎることができた。しかも、学習の成感感は、「文章が書けるようになる」ということで、充分に満たされる。ところが、二度目の門である「漢字」は、外国語の綴りを覚えるに等しいほどの、抵抗感のあるものである。その上、成感感は、「かな」を「漢字」に書き改めるといった程度のもので、前者に比べると極めて低い。しかも、学習体系は複雑で、

一、今までと同じように、「話しことば」ないしは「かな」によって語彙を習得していく学習。

一、漢字を、すでに習得している語彙と結びつけていく学習、ないし、すでに習得した語彙を、漢字に書きかえていく学習。

一、漢字によって構成された語彙を習得していく学習。といったものが、ほとんど無秩序に、並行して進んでいくことになる。「語彙が発達し、読み書きが目立って進歩する」この時期に、

このような学習を一挙に進めなければならない学習者は、決して幸福な状態にあるとはいえない。

「かな」ならば、その精神年齢にふさわしい作品を、ふさわしい速さで書けるものを、漢字を用いようとするために、想が途絶える、時間がかかる、未学習の漢字を書く、といった、混乱とも錯乱ともつかない状態が、個々の児童の中で起っているはずである。しかも、クラスの児童の語彙数や発達段階には散らばりがあろうから、漢字を教えるとしても、焦点が定まらず、文字として教えるのか、語彙として教えるのかさえもあいまいな授業になってしまうのではなからうか。

(注3)

このような状態は、なにも、小学校中年限って特徴的に表われるものではない。語彙習得が続いている限り、この状態は続く。「かな」・「漢字」という二重構造は、高等学校に入って、「かな」・「新字体漢字」・「旧字体漢字」という、新しい障壁を迎えることにもなる。

母国語を習得していく過程をたどっていくと、決して、「どこの国でも同じ経過をたどる」ということにはならないことがわかる。我が国の場合、表記に二重の構造を持っているゆえに、欧米諸国には見られないようなむづかしい問題を背負っている。加藤周一氏のいう「雑種文化」的性格が、まさしく、文字の世界にも影を落している。

「文明の基盤たる文字は、各人文科学のカナメにあっている」と、フランスのシャルル・イグナーが言ったという。単一の文字を持つている国と、「漢字」・「かな」という二つの文字を持つてい

る国とは、その文化の構造に大きな違いが生まれて当然である。

一般に、作文の指導者は、この問題について、つめた思考をしていないように思われる。その理由の一つに、指導者そのものが、「漢字」派と「かな」派の二極に分かれてしまっていることが考えられる。一方は、漢字・漢文の側に立ち、漢文教授法の長く重い伝統を担いつつ、「かな」の世界を一段低いものとして、理解しようとしなない。他方は「かな」の側に立ち、漢字・漢文の世界に術学的な臭いをかいで、正視しようとしなない。

※ ※

「和漢混交文」と一口にいっても、その実体は、時代や書き手によって、千差万別であった。戦後の一連の改革によって、表記の基準は一応定まってきた。しかし、改革の頂点ともいうべき「正書法」の考え方が出されるに及び、改革の流れは止まってしまった。その後、むしろ、少し流れを戻した地点で安定しようとする気配である。

正書法の考え方は、日本語の二重構造を、一挙に、一元に近い形でまとめようとする試みであった、とすることが出来る。この考え方には、多くの利点があるにもかかわらず、大衆の受け入れられるとやらならなかった。その理由として、二元の調和は自からの基準で作ら出し、自分の力の範囲で表現生活を楽しまたいという、素朴な願いの根強いことが考えられる。

私たちは、明らかに「漢字」と「かな」の世界にいる。「かな」の世界が、まるで空気のようにながらぬに我々を囲んでいるのに対し、「漢字」

の世界は、各自が自らの力に従って獲得すべきものとして存在している。「漢字」と「かな」とは、全く異質の文字であり、「和漢混交文」として、一つのまとまりを与えられるのは、一つの言語主体を通して、初めて可能になるといった性質のものである。

小学校では、「かな」の世界から入る。「かな」の世界には「かなの論理」があろう。「かな」の世界は、「思ったとおりに書く」世界である。児童たちは「せんせい、あのね……」という書き出し文に誘われて、それぞれの思いを筆に託す。

高等学校に入って、生徒たちは、本格的に「漢文」の世界を見る。すべて訓読されるといっても、そこには「漢文の論理」がある。そこには、もはや、「思ったとおりに書く」世界など、どこにもない。獲得すべき言葉と文脈があるのみである。それらを学習者は、無条件で受け入れなければならない。

このように見てくると、和漢混交文の一方の核である漢文が、義務教育の中に位置していないということは、いかにも奇異な感じを与える。事実、生徒の中に、「漢字」と「かな」の間に質の差を感じない生徒が、年々増えているような気がする。筆順などは驚くほど正確に書けるのに、その語の働きとなると無頓着な生徒が多いのである。

※ ※

「漢文の授業は、作文教育と深いつながりを持つ」と言い切ることは、かなり唐突な感じを与えるかもしれない。しかし、漢字といふ、漢語といふ、また漢文脈といふ、それが日本人なりに、これだ

と確信して受け入れられた根源的な姿は、やはり漢文の中に存在しているであろうし、語感そのものも、その中で生きていたのである。高等学校の国語科の中で、「漢文」の授業がどのように位置づけられていようと、作文教育の視点から見れば、「ふるさと」に住む漢語の働きがどのようなものであるか、その実態を知らせる唯一の機会となろう。

和漢混交文が、和語と漢語の緊張関係の所産として生まれるものであるならば、一方の原点である漢文をしっかりと支える必要がある。もし、その努力を怠ると、漢語の衰退した部分は、新しい外来語にとって代られていくであろう。このことは、火を見るよりも明らかである。

かつて、「漢字・漢語」は、中国文化吸収の所産として取り入れられてきた。江戸・明治以降は、多くの欧米語が、かなりの無理をしてまでも漢語に置きかえられてきている。欧米語が漢語に置きかえられたのは、原語をそのまま用いるよりも、より「通じ合う」可能性が高かったからである。つまり、原語と翻訳語の、「通じ合い」の場における力関係の所産として生まれたと考えられる。

もし、漢語よりも、カタカナ書きの欧米語の方がわかりやすいといった事態が生じたらどういうことになるか。今使われている多くの漢語は、カタカナ書きの欧米語に変えるであろう。現に、多くの化粧品品の品名には、もはや、昔日（たった、十年ほど前のことである）の面影はない。和・漢の二重構造は、やがて、和・欧の二重構造に変わるかもしれない。二重構造を持つ言語は、本質的にそういう弱い一面を持っている。

先日、十名ほどの女生徒（主として一年生）と話し合ったところ、彼女たちは、もう太宰治など古くて読めないと言っていた。十年前には、どの学年にも、太宰かおれの女生徒は、確実に数人ずついたものだ。中村光夫氏という「移動の時代」は、庶民をも巻き込んで走り出したかに見える。

当面、私は「漢文の授業は、作文教育と深いつながりを持つ」という前提に立つ。和・ x 混交文の「 x 」の部分が、例え将来不確定であるとしても、その変遷は、遅いほどよいと思うからである。

(二)

小学校五年とは、どんな学年だろう。

「知的な面では思考力が増し、批判的、抽象的、科学的な考えが目立ってくる。（中略）やがてはじまろうとしている青年期をひかえて、不安、動揺の見られる子どもも出て来るのが、高学年の児童の特徴であるといえよう。」（注4）

すでに、青年期が始まろうとしている。もう、心理的には、高校生に近い。傷つきやすい心は、徐々に育っているのである。

一つの国民にとって、心理的な動揺期を迎える前に、母国語習得のための基本訓練を終えておく、ということは、大切なことに違いない。仮に、リンケの指摘したような事実があるにしろ、小学校中学年ぐらいいまでに、その落差が縮まってくれば、言語習得のための心理的な負担は軽くて済むはずである。しかし、我が国の場合、

「漢字」・「かな」の二重構造があるゆえに、「漢字」の学習が二・三年遅れてくる。しかも、組織的、本格的な授業は高等学校にまで持ち越されていることになれば、学習心理に精通した指導法が考えられなければならない。

我が国の場合、「漢字」の学習が、必ずしも青年の自意識を補強する方向では進んでいない。漢字を正確に駆使することによって、その青年のプライドをいよいよ確かなものにするといった機会は、ほとんどない。

実情は、むしろ逆である。新学期も間もなく始まろうとする頃、職員会議の席で、メモ付きの封筒が私のところに回ってきた。ところが、その封筒を手にした人は、必ずニヤッと笑うのである。

「作文の提出が遅くなつてすみませんでした。——一進入

生より——」

おそらく、走り書きをして、会議中の私の手もとに届けようとしたのであろう。顔を赤くして、一心に走り書きする生徒の顔と、それを見る職員の顔とを重ね合わせたとき、私は暗澹とした。送り手と受け手との間に、何という気持の差があることだろう。メモを送った生徒は、少し遅れたとはいふものの、家から、わざわざ学校まで、届けたい一心で来たのである。その行為の重みと、「進」一字の書き誤りから生まれた結果とを比べてみれば、その軽重は明らかである。なのに、このようにしか受け取られないとするならば、生徒にとつては、誠に不本意なことと言わねばなるまい。

ところで、作文指導者は、果してこのような「不本意な通じ合い」

から身を守ることができらうか。むしろ、生徒の心をどんどん傷つけていくような立場に立つことが多いのではなからうか。

※ ※

自意識の芽生えと漢字学習の悪しき出会い、ないしは、文章を綴ることの負担を少しでも軽くさせ、本人の成長を助けてやるために、私は、青年心理学に学ぶことを提案したい。

青年期の特質については、一般的に、次のような見解がある。

「人間の発達をみると、幼児期や児童期に身につけた行動や生活慣習の多くは、無意識的、他律的に学習されたものであって、自覚的に形成されたものということはできない。(中略)

これに対して、青年期において新しい行動や習得を獲得することは、意識的、自律的、自覚的におこなわれる。いや、自覚的でなければおこなわれないと特徴があるといつてよい。もちろん、新しい行動や習慣の学習の仕方には、幼児期以来形成されてきた性格や、行動傾向が反映され、その影響——それを肯定しようとしてそれに反発しよう——からまったくのがれることはできないであらう。しかし、青年はそのような影響の重さを認めながらも、古い自己を改造し、新しい自己を創造していくことができるのである。」(注5)

もはや、学習は、本人の自覚なしには成し遂げられなくなっている。生徒の自覚を引き出していくには、何よりも指導者が、生徒を

知っていなければならぬ。生徒と「通じ合う」ことができないければならぬ。

「根性はなぜ必要なのかと青年に問われて、おとなをはぐらかすものと怒ったり、人生を心ゆくまでエンジョイしようとする青年の態度を、にがにがしく感じたり、核兵器によって人類の存続が危機にさらされているという青年の憂いを、青年らしい論理の飛躍と嘲笑したり、戦後民主主義の原点を、戦争責任のあり方に求めようとする青年を、Perfectionism(完全癖)ときめつけたりしているうちは、表面を糊塗しているだけで、青年とのコミュニケーションは全く断たれているのであり、それこそ青年がわかっているのではないのである。

研究者が青年の論理によってものを見、青年の感情によってもものを感じる、青年との一体化によってだけ、この難問は克服できるのである。」(注6)

「青年心理学を進めてゆくと、それぞれの研究領域、それぞれの研究課題が、三つの基本的な問いに集約されていることに気づく。

一、青年期とはどういう発達の時期なのか?

二、現代日本の青年は、どのような感情を持ち、どのように考え、どのような生き方をしているのか?

三、この一人の青年は、どのように生きる可能性を持ち、どう教育、どう指導すべきであるか。」(注7)

このように見てくると、青年心理学の関心事は、高校教育、特に作文教育に携わる者のそれと重なる部分の多いことがよくわかる。

作文教育は、生徒との「通じ合い」を前提として成立する教育である。書き手から読み手へ送られる心を一時棚上げにして行なわれる「作文指導」の範囲は、ごくわずかの部分と考えた方がよい。

とは言うものの、生徒と「通じ合う」ことは、そう簡単なことではない。

「高校生の登校拒否問題は、昔も怠学という形であったし、職場をずるけるという形であったし、人生のすべてが空虚になってしまふということがあった。不安定な心身の成熟や、社会的に過渡的な集団にある青年期には、いつの時代でも、どの社会でも見られた現象である。ところが、この登校拒否やスクール・ホピアは、怠学やずる休みと本質的に異なっていて、むしろ、まじめで親や教師の期待に答えなくてはならないという責任感を持っているような青年に見られるという、全く新しい現代的な疎外形態としての現象・世代的な現象なのである。

つまり、人類という類的な心身の成熟としての青年期的な必然的現象、青年性は、常にその置かれた歴史Ⅱ社会的状況という種の偶然性(世代性)を伴って発現している。まさに弁証法という、必然性は偶然性を媒介してのみ発現するという論理によって動かされているのである。」(注8)

もはや、教師は、単なる「善意」や「思いやり」で生徒に接する

だけでは、生徒の眞の姿を理解しにくくなってきている。特に、作文の指導ということになると、作品の内容に対する評価や、指導の過程において、誤った判断を下す可能性がある。生徒が、自分の内面をさらけ出せばさらけ出すほど、誤った判断によって受ける傷は大きい。私たちは、どうしても、青年心理学者の知恵を借りなければならぬ。

(三)

生徒との「通じ合い」の困難さは、また、別の面でも残っている。

「二カ月ほど前のある晩、私の住む高層住宅の階上で子供があまり走り回るので、がまんしかね『時間を考えてもう少し静かにして欲しい』と頼んだ。そのとき玄関に出て来た若い夫婦に、私は『こんな小さな子供に走らせるなどいいのか。こんな小さな子供をしかって、もしひがんだら、あんな責任をとってくれるか』と食ってかかられた。」(注9)

これに類することは、学校の中でも、日常的に起ってきている。しかも、そういう事態に、教師側が正しく対応できていないというのが実情ではないだろうか。これでは、正しい議論は生まれてこないし、生徒との「通じ合い」を成立させる手がかりもなくなってしまう。議論をしたり、説得したりするためには、「論理」について、ある程度の常識を身につけておく必要がある。

「不幸にして現在まで論理とか論理学というものは多くのひとびとの環視のなかに立たされる機会をもたなかった。それは『論理学』としては哲学者たちの蔵品の一部として戸棚の片隅に置きざりになって人目にさらされなかったし、また『論理』としては、ある種の社会形態のなかでは一般民衆がもつには『好ましからぬ武器』として意識的に敬遠されてきた。」(注10)

「論理というものがその価値をみとめられるのは、人間のひとりひとりが『言論の自由』の原則のもとに、対等に自己の意見を発表し、暴力や権力によってではなくて『論理』の規準によって言明の真偽を法定しようするような社会においてであろう。(中略)官吏が論理的に問答することを拒否し、人民に語るときは(おそらく意識的に)混乱した論理で相手にたいして煙幕をはり、他の権力的手段によってものごとを運ぼうとするような社会では、論理は支配階級だけの有力な武器でしかありえない。」(注11)

「私は『論理』というものの能力とその限界とにたいする正しい理解は、将来の人間のすべての知識の道具として、『言語』や『数字』と並んで最も基礎的な学問の分科に属すると考える。」(注12)

昨今、大学において、論理に関する講座が多く持たれるようになったという。実際、これほど多くの情報が飛び交い、強弁・詭弁のまかり通る世の中にあって、「論理」というものの能力とその限界」

に對する正しい理解は、一人でも多くの國民に要求されるものであらう。

それよりも、何よりも、私たちは、日々、「生徒の言い分」に、正しく対応していかねばならない。生徒と教師が、お互いに強弁・詭弁をあびせかけるようになれば、両者のけじめをつけるものは、「権力」だけしかなくなってしまふ。

「作文教育」は、「言論」の重みを教える教育である。「言論」は、正しい論理に支えられてこそ、その威力を発揮する。作文教育の中に、どうしても論理に関する学習を組み込まなければならぬ。

論理学からの、作文教育に資する手引書が強く望まれる。

注1 「児童心理学——児童の発達と指導——」竹田俊雄(代表)

編・協同出版社

2 「シンポジウム・作文教育実践体系の構築・現場の現実に即して」国語科教育学研究：4 明治図書

3 語彙を、「漢字」・「かな」の両方から獲得していく時期

(小学校六年)における習得語彙認定のむつかしさ、あるいは、習得者の心理的なゆれについては、文部省、国語シリーズ No. 51「児童生徒の語い力の調査」(光風出版)のうち、「3・児童・生徒の語い力の調査協議会要録」に、かなり素直な形で出ている。この中で、鳥取県から、「そのことばの意味は知らないだろうと思われるのに、漢字がやさしいためか、1.(筆者注・よく知っていることば)や2.(同・だい

たいわかることば)に○印をつけているものもある。ところが、反対に漢字がむずかしいと、やさしいことばでも知らないとしたりする」という報告がなされている。また、文部省調査局国語課長(同・当時白石大二氏)は、「語い調査ということでは、漢字をかな書にするか、ふりがなをつけるか、音声化するかを見きわめなければならぬ。漢字を含めての調査なのかということになってくると、語いに対する本質的な問題となる」と述べている。

4 1に同じ。

5 「青年期 その心理と思想」加藤隆勝著 誠信書房

6 「青年心理学 現代心理学叢書」西平直喜著 共立出版

7 6に同じ

8 6に同じ

9 「詭弁論理学」野崎昭弘著 中公新書

10 「現代論理学入門」沢田允茂著 岩波新書

11 10に同じ

12 10に同じ

(滋賀県立長浜北高等学校教諭)